

周囲の支援選手に力

1996年に発足したマツゲン箕島(本拠地・有田市)は、地元箕島高OBらでつくる「箕島球友会」が前身で、現在はNPO法人が運営する。選手はスパーチェーンの「松源」が雇用して支える。強豪の社会人野球チームほどの整った環境はないものの選手たちは前を向く。周囲も「推しアプリ」の導入など、さまざまな支援のアイデアを具体化してより立てている。

【藤木俊治】

マツゲン箕島チーム紹介①

社会人野球 日本選手権

選手はいずれも早朝から主に店舗で業務をこなし、午後からは有田市郊外のグラウンドで日暮れまで練習に打ち込んでいます。土日祝日など書き入れ時は終日勤務の日もある。

主力メンバーでポイントゲッターの白滝恵汰(25)は水産部の品出しが主で、日によってすも握る。先発投手陣の一角でもある松村亮汰(23)は農場で農産物を収穫したり、魚介類をさばいたりの日だ。

練習に充てる時間に制限がある中でも選手たちの言葉は力強い。白滝は「体力的にはきついが、人生にはプラス。同僚に応援してもらえるのもう

れしい」と仕事と野球を両立させる「相乗効果」も実感する。

新しい支援の動きも始まっている。

例えば今春から部の女性マネジャーらが中心となり、無料通信アプリ「LINE(ライン)」と連動させた「推しアプリ」

の運用を始めた他、「推しグッズ」の販売も始まった。

推しアプリは西川忠宏監督が知人にサービスを紹介されたことが縁で導入。アプリを通じて選手に応援メッセージを送ることができ、プロ球団ではなく、社会人チームがファン向けに「推し活」を展開するのは珍しいという。

「推しアプリ」の画面



野手らを集めたミーティングでプレーを確認する
—有田市宮崎町のマツゲン有田球場で

「推しアプリ」でファン層拡大狙う

まだ緒に就いたばかりで登録者数は非公開放だが、マネジャーの玉置華ノ葉さん(22)は「球場へ応援に来てくれる人にもアプリのことはまだまだ知られていない。チームを一般にも広く知ってもらうきっかけになれば」と話す。

推しグッズで販売するのは選手がモチーフの亚克力スタンドや選手名入りタオルとユニホーム、サインボール、サイン入りトレカなど。推しアプリとともにファン層拡大の一助にする狙いがある。

チームは野球教室の指導、津波避難路や学校に保育所の清掃など地域活動にも精力的に取り組む。有田市の玉木久登市長は「家族同然の存在で市民の誇り。勝てばまちが明るくなる」と大きな期待を寄せる。西川監督は「応援してくれる人たちの思いを真摯に受けとめてほしい。勝って地元を喜ばせたい」と意気込む。

日本選手権大会は28日に開幕。マツゲン箕島は同日午前10時からの1回戦で、初勝利を懸けて4大会連続出場の大豪、東京ガス(東京都)と対戦する。